

# 社会主義 理論学会

会報 第70号 (2014. 4. 20)

事務局 : 〒175-0093 東京都板橋区赤塚新町 3-4-8

田上方

TEL 03-5998-7682 郵便口座番号 00140-6-483911

E-mail: tagamimp@kk.iij4u.or.jp HP: http://sost.que.jp/

## 第 25 回研究集会

### 中国社会主义の現段階

王京濱（大阪産業大学教授）「目下中国経済の構造的  
脆弱性と李コノミクス」

大西広（慶応大学教授）「中国の政治改革について

科学研究費補助金「中国特色社会主义の多角的研究」プロジェクト

会場：慶應義塾大学三田校舎研究棟 A 会議室

東京都港区三田 2-15-45 最寄り駅：田町・三田・赤羽橋駅 問合せ先：03-5427-1517  
三田キャンパス案内ホームページ：<http://www.keio.ac.jp/ja/access/mita.html>

日時：2014年4月29日（火） 14:00～17:00

資料代 会員、中国特色社会主义科学研究費プロジェクトメンバー無料、非会員 500 円

### 社会主義理論学会 2014 年度総会

日時：2014年4月29日（火）13:00～14:00

場所：慶應義塾大学三田校舎研究棟 A 会議室

# 社会主義理論学会第 64 回研究会 報告

2013 年 10 月 6 日専修大学神田校舎にて社会主義理論学会第 64 回研究会が開催され、中村宗之会員と竹内晴夫氏がそれぞれ、人類の交換性向と電子マネーに関して報告した。両氏より報告要旨が送られてきたので、以下に掲載する。

## 直立二足歩行の経済学

中村 宗之（立正大学）

アダム・スミスは『諸国民の富』において、人間の持つ交換性向から分業を説き、経済学の体系を作り上げた。また、『道徳感情論』では、やはり人間の持つ他者への共感の感情を軸に倫理学を説いた。現在の諸科学の成果からあらためて見てみると、交換性向も共感もいずれも生物としてのヒトの持つ特徴的な能力であるとともに、他の類人猿や霊長類にも多少とも共通する要素でもあると考えられる。

集団で生活する中から個体が大きな利益を互いに得るといふヒトのあり方において、共感とは相手の感情を読み、それに配慮したり先回りして行動したり、非常に有益な能力である。また、モノを交換する能力についても、非常に有益である。集団生活の中から各個体が利益を得るといふのは、霊長類だけでなく、捕食者からの防衛などの点では多くの哺乳類にもみられるが、毛づくろいなどのいわばサービスや、果実などモノのやりとりということだと、チンパンジーやボノボでよく観察される事柄となる。

ヒトはモノのやりとりが顕著に観察され、商品交換ももちろんだが、多少の時を隔てた共同体内の贈与関係、互酬的關係においても、モノのやりとりが特徴的といえる。スミスが指摘した交換性向であるが、ここでは交換能力としてとらえたい。ヒトは意識的に交換するのであり、商品交換と互酬的關係は、共通する要素は多いとはいえ、一応別の行為と考えられる。

チンパンジーと、ヒトに連なるアウストラロピテクス属はおよそ 700 万年前にそれらの共通祖先から分かれたという説が現時点では有力と思われる。その後ヒトは、足の指が変化し、モノをつかみにくい現在のよう配置になり、つまり木に登る必要性が薄れた。そして、脳の巨大化、火の使用や、石器など道具の使用がみられるようになる。発声能力の獲得や、遠距離交換の痕跡、文字の使用はずっと後のこととなる。

それらのヒトの特徴に先立ち、アウストラロピテクス属とチンパンジーが区別されるのは、直立二足歩行である。これに適した頭骨と脊椎の接合角度などにより判断されるものだが、直立二足歩行は何かかなりの重要性を持つものと考えられる。

移動には一般に四足歩行のほうが適しており、そういう哺乳類が多い。あえて骨格まで

変化させて直立二足歩行になるというのは、かなりのメリットがないと起こらない変化である。これまでもいくつかの説明が試みられてきたが、私見では、現在最も有力な解釈は「運搬起源説」である。

チンパンジーやボノボで最も二足歩行が観察されるのは、食べ物を持って移動するときだという。エネルギー効率からいっても、たんなる歩行や獲物の追跡では四足歩行が効率的と思われるが、直立二足歩行が有利なのは、長距離にわたりモノを持って移動する場合であろう。モノとはおそらく食べ物であり、後には平地で生活するための肉食獣対策として手を活用したことが考えられる。

チンパンジーは熱帯雨林で生活を続けたので、環境の変化はあまりなく、したがって身体機能や生活形態もあまり変化がないと考えられるが、ヒトは熱帯雨林から出て、サバンナなど乾燥地帯を生活領域としていったと考えられている。

熱帯雨林と乾燥地帯との重要な違いとして、食物密度がある。熱帯雨林は食物密度が高いので、チンパンジーは多少ばらけて行動するものの、実のなっている大木を見つけると仲間に知らせ、皆で食事をする。群れ全体で移動することが基本となっている。しかしこのような菜食行動は、乾燥地帯ではとりにくい。食物密度が低いところで、群れ全体で移動していたら、移動にかかるエネルギーと、見つけた食物から得られるエネルギーの収支が合わないことになりかねない。

ヒトの祖先は、乾燥地帯に進出する際、「群れ全体で移動し、食物を発見し、その場で食べる」というチンパンジーの様式ではなく、「数人のグループに分かれ、食物を探して徘徊し、肉食獣の食べ残しや、果実や根菜を見つけ、それを手に持ってすみかに持ち帰り、群れの中で互いに分配しながら食べる」様式をとったと考えることができる。

このような行動様式は、チンパンジーは採用できなかった。ここには、チンパンジーの婚姻形態が乱婚であることが関係していると思われる。乱婚的であるので、群れから遠く離れたオスは、別のオスが発情期のメスと交配することを阻止できない。これは遺伝的利益を著しく損なう。現在、熱帯雨林と乾燥地帯が接している地域で生活するチンパンジーが、乾燥地帯に進出できないのも、ここからきていると考えることができる。したがって、この状態が続く限り、チンパンジーはヒトのように進化することはないように思われる。

それに対してヒトは、たまたま一夫一婦制が基本で、オスも自分の子どもをかなりはっきり認識するような婚姻形態であったため、交配上の不利なく乾燥地帯への進出が可能であったと考えられる。ヒトが乾燥地帯に進出可能となったこのことを、「ハンター仮説」という。

ヒトは実際、徐々にこのような行動様式をとるようになったのだとすれば、このときに重要な能力となるのが、モノの互酬的やりとりや交換にさいしての利益を慎重に計算し行動すること、しかし計算高くなるだけでなく、群れの中での長期的な協力関係を破壊しないよう、相手の利益や感情に配慮する能力、共感能力といったものであろう。ヒトの数理的な能力は、いわばリングやミカンの個数を数えるところから始まり、経済的計算能力はモ

ノに関わる利益や負担を把握するところから始まったと考えても、あながち外れてはいないのではないか。そしてそのような個体間の複雑な関係、人間関係の情報処理や的確な判断のために、ヒトの脳は「社会脳」として巨大化する必要があったと考えられる。

報告者は、チンパンジーとヒトとを比較し、ヒトの知能の高さを誇るつもりはまったくなく、むしろ彼らの感情の豊かさや、集団生活における駆け引きなどまさにマキャベリ的な知能の高さには感動している。しかしそれでも彼らとホモ・サピエンスとの間に違いがあるとすれば、それはこのような直立二足歩行と、それを不可欠の構成要素とする乾燥地帯での行動様式に根ざしていると考えたい。

<参考文献>

中村宗之 [2013]「ホモ・サピエンスの交換性向 一類人猿の比較研究」, 勝村務・中村宗之編著『貨幣と金融 一歴史的転換期における理論と分析一』, 社会評論社

## 電子マネーの展開と貨幣論争\*

竹内晴夫 (愛知大学)

はじめに

電子マネーは 1990 年代後半に実験的に導入され、当時「夢の通貨」として近い将来に現金に代わって流通し銀行が消える日も近いといわれたが、その後しばらく普及のめどが立たなかった。しかし、2000 年ごろから交通手段との共用で利用者が増え始め、2007 年に流通大手二社 (イオンとセブン&アイ) が電子カードを導入してからは急激に拡大していった。本報告では、第一に、急伸長した電子マネーの現状を確認するとともに、電子マネーの貨幣システムにおける意義を明確にする。また、電子マネーをめぐる議論で問題にされた電子マネーの概念、価値の戻し、電子マネーと「現金」とのちがい、不換の日本銀行券の性質などの争点について論じたい。

### 1. 電子マネーの最近の展開

#### (1) 少額決済市場における電子的決済手段の増加

現在、電子的な小口決済手段にはさまざまなものが存在する。エディやスイカなど IC カード型電子マネーの先行組のほかに、2007 年にナナコやワオンなど流通系 IC カードも登場した。交通系電子マネーも地域特有のカードが発行されるとともに相互利用が可能になってきている。この他にも QUICPay や iD などの「後払い型電子マネー」も登場し決済件数を増やしている。ただ、これらは広い意味で電子システムを利用した電子マネーであるが、スイカなどの電子マネーと決済のしくみが異なっている。

#### (2) 電子マネーの概念

エディやスイカ、ナナコ、ワオンなどのいわゆる「先払い型電子マネー」は、現金と引き換えに IC カードに発行体の価値 (商品またはサービス価値) を記憶させ、その後商品や

---

\*勝村務・中村宗之編『貨幣と金融』第 10 章「電子マネーの新展開と電子マネー論争」149～167 頁参照。

サービスと引き換えに、加盟店の端末機器で商品価値分の価値が差し引かれる。たとえば、現金と引き換えにスイカに蓄積された JR 東日本の「価値」は、改札口を通ったり加盟店で商品を購入したりするたびに、商品・サービスの価格に相当する「価値」が減じられる。ここで電子マネーとは、IC カードなどの電子媒体に、電子的な価値データが蓄えられて買物が行われるシステムまたは蓄えられた電子的な価値そのものを意味する。

これに対して、「後払い型電子マネー」と呼ばれる QUICPay などの簡易クレジットカード（信販会社が介在）やデビットカード（キャッシュカード）による決済は銀行による預金決済であり、「先払い型電子マネー」はシステムが異なっている。クレジットカードやデビットカードが決済で行っていることは預金の振替指図であって、スイカのように銀行以外の発行体の価値データを電子カードに蓄えて買物を行うものと異なっているのである。

### （3）電子マネーの流通実績

電子マネーの流通実績は、2010 年 4 月に電子マネーの発行枚数が 1 億 3 千万枚超と日本の人口を越え（13 年 2 月に 1 億 9 千枚）、端末台数も同年 6 月に 76 万 8 千台、12 年 6 月には 111 万台と急拡大している。もっとも、インフラの数と実際に利用されている数字は必ずしも一致しないが、決済件数や金額も急激に増加していることは確かであり、10 年 6 月には決済件数が約 1 億 7000 万件、決済金額が 1400 億円になった。実に 2007 年 6 月から 2010 年 6 月までの 3 年で、決済件数が 2.4 倍、金額が 2.8 倍程度になった。

このように増加傾向にある現在の日本の電子マネーの特徴は、まずエディのほか交通系や流通系などの電子マネーが発行されており、発行体が多様化していることである。また電子マネー発行の狙いも、決済手段として現金取扱コストを節約するだけでなく、ポイントサービスや顧客囲い込みによる販売促進を図るなど多様化している。

決済手段としての電子マネーは、2009 年に決済金額 1.25 兆円（2011 年では 2 兆円超）で、これは現金通貨全体の 0.14% にすぎないが、硬貨量に対して 2.6% にあたる。したがって電子マネーは少額取引で利用される硬貨量の一部を代替しつつあるといえる。ただし現在、貨幣流通全体に対する電子マネー決済の割合はわずかであり影響も小さい。現行の電子マネーは、発行体の経営の安定性およびサービス提供に対する信用をもとに発行体と加盟店のネットワーク内で流通しているのである。

## 2. 電子マネー論争

### （1）問題意識—電子マネーの流通根拠

1990 年代後半、情報通信技術のめざましい発達の中で電子マネーが登場した時はすぐにも現金にとってかわるといような風潮があったが、その背景には電子マネーを単に価値情報ととらえ電子技術が発展しさえすれば普及するという見方があった。貨幣理論の世界でも、貨幣はもともと無根拠であり単なる記号にすぎないのだから、電子マネーはむしろ、貨幣の記号性、象徴性を端的にあらわすものであるといった主張がなされた。

岩井克人は、貨幣は流通根拠がなくとも「貨幣として使われるから貨幣であるという自己循環論法によって」（「電子マネーの貨幣論」『電子貨幣論』[1999] 25 頁）流通するとし、

電子マネーはその「貨幣の自己循環論法のもっとも純粋な表現である」としている。しかし既述のように、電子マネーは無根拠で流通するものではなく、発行体の経営の安定を基礎に発行体と加盟店のネットワークで流通するものである。貨幣として使われるなら流通する、使われないなら流通しないという循環する論証では何も説明したことにはならない。

## (2) 山口重克の批判—電子マネー概念、価値の戻し、不換銀行券

山口重克は、まず IC カードに電子価値を蓄えて決済するシステムとする筆者の電子マネー概念に対し、電子マネーは従来の預金決済を電子化しただけで新たな貨幣システムではないとする吉田暁の見解を支持した。電子マネーと呼ばれているものは「預金価値の移転を指図する手段」「ここでの決済はやはり銀行の預金口座からの振替決済」（「電子マネーの貨幣論的考察」『流通の理論・歴史・現状分析』[2006] 43～44 頁）と論じた。

しかし、電子マネーに記録保存されている「価値」は、銀行の預金ではないし現金である日銀券の価値とも異なっている。購買力となっているのは、IC カードに蓄積された発行体の価値であり、預金口座間の移転を指図する小切手ではない。

第二は、電子マネーが現金への払い戻しができない点を信用貨幣の形式の不備として筆者が論じていることに対して、山口は、価値の払い戻しは単に「その人物の単なる再預金というか、債権の形態を変えるだけ」（同書 46 頁）と批判している。しかし、これも電子マネーを預金価値の移転を指図する手段とみていることからくる誤解である。電子マネーは銀行とは異なる発行体の価値だから、現金や銀行預金に転化することは、電子マネー発行業者の価値から日銀券や銀行預金に再転化されることを意味する。つまり銀行以外の発行体に対する債権から（預金の場合）銀行への債権に再転換されるのである。

第三に、電子マネーと「現金」のちがいに関わる論点について。現在の電子マネーの流通根拠は、発行体の経営の安定性と発行体と加盟店の間のネットワークである。これに対して「現金」とは中央銀行券であり、中央銀行券の流通性の根拠は、原理的には中央銀行への信用とその経営であり、それは一国的規模の銀行組織と諸企業の経営の安定性に支えられて通常大きな流通性をもつ。両者の間ではその流通性の根拠の規模も質も大きく異なる。現行の電子マネーは、JR 東日本、イオンなどの個別企業が発行体であり、その発行体と加盟店のネットワークの範囲がマネーの流通範囲であり、そこに限界がある。

山口は、現金である不換銀行券についての拙論の規定について、「不換銀行券は信用貨幣とは言えない。『一種の』支払約束でもない」（同書 44 頁）と述べている。また不換銀行券は「信用貨幣の流通性の根拠としての形式的根拠と実質的性質という基準のいずれからいっても信用貨幣とはいえない」（同書 45 頁）としている。なるほど、現在の不換銀行券は、支払約束証書が貨幣性をもつという信用貨幣の定義では、不換になれば「信用貨幣」とはいえない。しかし、現在の銀行券も、受け取る債権と引き換えに発行されており、山口自身が述べているように、「手形の将来の価値が先取的に貨幣性を与えている」（『金融機構の理論の諸問題』[2000] 167 頁）。これは信用貨幣の実質的性質であり、不換の中央銀行券の発行・流通も受け取る手形の将来の返済に依存していることは明らかである。不換銀

行券も、原理的な信用貨幣の一面である実質的な根拠をもって流通しており、その根拠を喪失すると、早晩、流通性を減じる力がはたらくことになる。

このように、電子マネーや不換の銀行券についても、原理的な信用貨幣論を基礎に分析することは可能であり必要でもある。原理を基準にしながら、現実の国家の活動や制度などの諸要因を考慮して現実を分析することが求められるのである。

## 社会主義理論学会第 65 回研究会 報告

2014 年 2 月 9 日に専修大学神田校舎にて社会主義理論学会第 65 回研究会が開催され、平岡厚会員がインターネットと社会主義について報告した。また 2013 年 12 月 21 日と 22 日に行われた第四回日中社会主義フォーラムに関して、瀬戸宏会員により総括報告が行われた。以下に平岡会員による報告要旨と、瀬戸会員が当日配布したレジュメを掲載する。

### 子供が安心してインターネットが出来る社会としての（本物の）社会主義 平岡 厚（杏林大学を 2014 年 3 月定年退職）

春名風花（はるな・ふうか、本名、2001 年 2 月 4 日 - ）という少女タレント（愛称：はるかぜちゃん）が、9 才の時から両親の同意の下で twitter を運営し、それをファンとの日常的交流に用いている。twitter の世界では、匿名性を悪用した誹謗・中傷や暴言が渦巻き、芸能人を含む有名人の実名アカウントは、その被害を受けやすいが、彼女は、その風潮に対して、一貫として「そんなのはいやだ」と言い続けている。2014 年 2 月の時点で、彼女の twitter には、約 16 万人のフォロワーがいるが、その中や周辺には、彼女を絶賛する者が多数いる反面、相対的に少数であるが彼女に対するテロを実行しかねないほど反感を持つ者もいる。この現象の社会的背景について考察した。

彼女の twitter には、彼女の発言（「つぶやき」）に対する非難が殺到する「炎上」がしばしば起きている他、暴言の着信やネット上での彼女に対する誹謗・中傷が常態化している。2012 年 11 月 1 日には、彼女自身の「エゴサーチ」（ネット上における自分への言及を調べた行為で、芸能人は随時行っている）により、「はるかぜちゃんをナイフで滅多刺しにしてドラム缶にセメント詰めて殺したい」という「つぶやき」が、前日に他所で投稿されたことが見つかった。その際、彼女が体調を崩したこともあったので、「だから子供にはネットを利用させるな」という意見も少なくなかったが、それに対して、彼女は、「他人に平気で死ぬとか殺すという人が放免されて被害者が悪いことになるのは間違っている」「幼稚園でも小学校でも、人の不幸や死を願うのはいけないと教えているのに、それを無くそうとして注意したり闘ったりするのを何故とめるか」「子供が安心してネットを使える社会にしたい」と反論し、その際、自分に暴言をぶつけて来る相手の発言の一部を非公式リツイート

で引用して、やりとりを見ている者全員に先方のアカウントを晒して、そのような主張を展開した。これにより、16万人の彼女のフォロワーの一部による加害者への同様な報復攻撃や twitter 会社へのスパム報告（不正使用の告発）による多くのアカウントの凍結、という事態が生じた（同様な現象は、その後も時々起きている）。

彼女に対する否定的評価の当否について具体的な検証・考察を行った結果、彼女を、twitter を含むネット上で攻撃している人々の主張は、基本的に根拠のない言いがかりであり、恣意的で不公正なネガティブ・キャンペーンにすぎないと結論した。彼等は、ブラック企業の経営側が、法律で守られているので表向き手が出せない労働組合活動家に対するように、彼女を、いかなる汚い手段を用いても打倒・排除すべき重大な脅威・強敵と認識し、自己防衛の為に、その作業に打ち込んでいるようである。その中の1人が、実行する意思の有無はともかく、素手で行うことが物理的に可能な相手の殺害の実行方法を想像して、「ナイフで滅多刺しにしてコンクリート詰めにする」と匿名でネット上に発表したのは、その種の「ネコがトラに見える」心理状態の反映であろう。

彼女がネット上で言っていることの多くは、人種、性別、その他の多くの人間の諸属性を越えて普遍的に正しいことなので、現在、彼女を敵視している者も、かつては、同様な認識を持ったり、それを聞いて賛同する人間であったが、ある時点で、何らかの原因で「変節」したと推定できる。「変節」の原因としては、学校での「いじめ」や、その誘因である管理主義的教育、家庭での虐待や不当な扱い等の他、新自由主義・市場原理主義が跋扈する昨今の格差社会における諸精神的ストレス等が考えられる。一般的に、十分な自己肯定感を持つように育って来なかった者や、利益誘導・脅迫によって動かされ易い者は、人生初期の外圧により「変節」させられ易く、又、一度「変節」すると自己肯定感がさらに弱くなり、「変節」の「負のスパイラル」に陥り易いのであろう（「変節」とは、「自分を含むすべての人は、一定の尊厳をもって取扱われるべきであり、それに反する他人の行為は容認せず、自分もしない」という原則を貫徹できない状態を意味する）。そこで、自分は「変節」により何らかの利益を得た、と主観的には思っている人々は、「変節」しない相手を、そのメカニズムを破壊して自分たちの既得権益を損なう者と認識してもおかしくない。又、彼等の当該「変節」体験には不快なものが含まれているので、その不快感が、自分の「変節」を正当化した後も当人たちの潜在意識に残り、その為、それを思い出させるものに会うと PTSD に類似する症状が出て、相手に対して余計に攻撃的になるのであろう。現在、自分の生活条件を悪化させている社会の仕組みや政治のあり方を問題にすべき時に、自己責任論にマインド・コントロールされて自分が悪いと思ったり、公務員や生活保護受給者、在日外国人等を攻撃している者には、そのような者が少なくないであろうし、その一部が、彼女の「アンチ」化していると推察される。又、「アンチ」側が彼女を非難する「つぶやき」を送ると、彼女からやめるように言われても、それに対する暴言や誹謗・中傷の報復「つぶやき」を送信して混乱を増強させていた彼女のファンの一部も、「変節」し切っただけではないが、ある程度それに近い心理状態にあるように思われる。人間が「変節」する現象を無

くすためには、社会から人間を「変節」させる条件を除き、又、既に「変節」した人間が、その正当化を断念して自分を「変節」させるべくマインド・コントロールした者（特定の個人よりは、むしろメカニズム）を糾弾する側に回り易い条件を整えて行く必要がある。そのような状況になるには、学校現場を含む社会の諸領域で、当該集団に属する人間の「文化的遺伝子」を突然変異させる必要がある。

最後に、彼女が目標であると言明している、「子供が安心してネットが出来る社会」について論じる。子供が安心してネットが出来る為には、すべての人が全く「変節」せずに一生を送り、又、各人が本来持っている利己的な面と利他的な面のうちの後者が前者より常に強い必要がある。そのような社会の政治体制は、旧来型の社会主義（を目指す）諸国（たとえ、資本主義的経済部門を一時的に根絶できても、社会主義としては偽物）を含む権威主義国家に見られる（た）、国定の思想・信条にもとづき上から組織されたものではなく、主権在民、基本的人権の尊重及び三権分立の原理により下から組織された民主的なものでなければならない。又、経済体制は、資本・生産手段の私有が基軸の資本主義から、それらの共有・公有にもとづく社会主義への全面転換・革命が完了している必要がある。当該2条件を同時に満たす政治・経済体制（これが、本物の社会主義である）が、世界のすべての国と地域に建設され崩壊せずに存続する（人間が、その体制に適用するように進化）ことが、子供が安心してネットが出来るようになる為の諸条件の一部である、と思われる。

そこを目指すレギュラーなルートは、先進資本主義諸国の有権者の多数が、「私有財産を持ち利用する権利（自由権の一部）のうちの、生計を共にしない第三者の雇用労働を伴う部分は、平等権、生存権と衝突し公共の福祉に反するので、社会民主主義の限界を越えて全面的に廃絶すべきである」と認識し、その意思を立憲民主制の手続きに則り貫徹して行く、という道程である。当該の平和革命・則法革命の過程が十分に進行した終末像は、「中心部に、その管理部門が、国公立の持株公社から派遣された者及び労働者が選んだ代表で構成される独立採算制の公的セクターである大企業や銀行が、又、その周囲に、労働者が自主管理する中小の協同組合セクターが配置され、さらにその外側を、その発展が資本主義的経済部門の形成にではなく当該同心円の内側に誘導される自営業的小規模私的セクターが囲む」という経済体制の立憲民主制国家である。

又、現時点の中国、ベトナム及びキューバについては、遠い将来に、生産力が資本主義的経済部門を縮小・廃絶できる段階に達し、かつ政治を民主化することにより、そこに合流する可能性が否定できないので、「レギュラーではない別のルートを辿って同じ場所に向いつつある仲間」として応援している

私は、1991年のソ連解体前後に生じた「国際社会主義陣営」の崩壊・変質の後も、資本の私有が一般には存在しない別な体制としての社会主義を目指す立場を堅持しているので、社会民主主義への転向に誘導しようとする圧力に対して、「目標をあきらめるのは個人の自由だが、それを押し付けるな！」と感じていた。その20余年後、同様な文言を、彼女が、自分のツイッター上で、「子供が安心してネットが出来る社会など永久に出来ないからあき

らめろ」という圧力に反発して述べているのを目にした時、(後日、大人になった時に、どのような政治的信条を持つかは、当然に彼女の自由であるが、子供が安心してネットが出来る社会を希求するという志向性については、)「その意気を喪失するな、自分の存命中のような歴史的に短い期間にはこだわらな、その最終目標を掲げ続けることを絶対に止めるな」というエールを送りたいと感じた。

一方、彼女が自分の **twitter** 上で、「死ぬ」等の暴言をぶつけて来る相手と、毅然と冷静に時にはユーモアまじりにやりとりしているのを見て、争い事を文明的に解決しようとする姿勢に感銘を受けた。私自身を含め、あくまで資本主義を清算して別な体制としての社会主義を目指す、という立場の者が、現在の先進資本主義諸国のような、努力次第では自分の子供や孫の時代に多数派になって目標が達成できる(その時は、子供が安心してネットが出来る状態が近づく)ような恵まれた状態にあったことは歴史的には稀であり、その条件が全くなかった我々の仲間・先輩たちは、目標実現の為に、所与の歴史的条件下で止むを得ず暴力を用いたのは当然であった。その際、彼等と彼等を弾圧していた側の関係性を考えると、彼等が政治的権力の獲得できた場合、敵を物理的に粉砕するための革命的暴力(それ自体は、封建制度を打倒する市民革命や植民地の独立戦争と同様に正当である)を一時的なものであると位置づけられず、そのことが後日の否定的現象(最後は体制の崩壊や変質に至った)の一遠因となったことは、彼等の誤りというよりは歴史的限界であったのであろう。

しかし、現在の我々は、そのような状況下で生成した「文化的遺伝子」を、突然変異なしに先進資本主義諸国の市民社会の次世代に伝承して、そこでの組織論や運動論に適用すべきではない。人間は、怒りや反発にのみ支配されて臨戦態勢を常態化すべきではなく(これも、「変節」の一種である)、平等の他に友愛にも留意し、又、(特に、以下のような傾向の組織の正式構成員は)多少意見が違うだけの相手を本当の敵と同等以上に憎むような習慣を生む組織論を改め、又、「力を下から上に流す革命を行なうことと、敵の陣営にいる諸個人を対等・平等な関係の友として愛する、ということは両立できる」という作風を率先して確立すべきである。学生時代から批判的支持者の立場で、その陣営の末席に居続けている者として、今、我々がその自己改革の努力を惜しむと、後日、もし支持してくれたり仲間になってくれたら大きな力になる逸材を味方として獲得できないだろうと、彼女の **twitter** を見ながら思っている。

参考文献

平岡厚：ある少女タレントの **twitter** 周辺における「両極現象」の発生と、その社会的背景について、杏林大学研究報告教養部門, 31, 59-73, 2014.

## 第四回日中社会主義フォーラム総括

瀬戸宏（摂南大学）

### 1. 日中／中日社会主義フォーラムの回顧

2008 日中社会主義フォーラム マルクスと東方社会 中国研究者7名来日

2010 中日社会主義フォーラム レーニンと東方社会 日本側8名参加

2012 第三回中日社会主義フォーラム マルクス古典と当代社会主義理論  
日本側8名参加

### 2. 第四回日中社会主義フォーラムの経過と概要

2012. 9 第三回中日社会主義フォーラムで中国側より第四回日中社会主義フォーラム開催希望

2012. 10 科研費「中国特色社会主義の多角的研究」申請（大西広代表、瀬戸宏、田上孝一、松井暁分担研究者）

2013. 4 科研費獲得通知（基盤研究（C）2013年度170万円、14年度70万円、15年度160万円）、

慶応大学東アジア研究所・高橋財団助成金とあわせ、フォーラムテーマを「中国特色社会主義の行方と理論問題」とする。

主催 社会主義理論学会

共催 慶應義塾大学東アジア研究所

科学研究費補助金「中国特色社会主義の多角的研究」プロジェクト

会場 慶應義塾大学三田校舎北館3F大会議室

日時 2013年12月21日、22日

約60名参加

第四回フォーラムの論文集は刊行しない。（経費その他）科研費終了時に、別のかたちで論文集刊行を考える。

### 3. 運営面での総括

評価すべき点

・二十名（中国側12名、日本側6名）の二日間にわたる、社会主義をテーマとするシンポジウムを実際に大過なく実行できた。

・参加者計約60名は、現在の日本の社会主義をめぐる思想状況を考えるとかなりのものである

・相互理解がかなり進み、率直な討論が実行できた。一日・中共に満足感はかなり高い

反省すべき点

・経費の関係と中国側の連絡遅れで、ポスターなどの宣伝物が作れなかった。

・討論の時間がやはり足りない一次回からは分科会制をとるのも一案

- ・一部の中国側論文到着が遅れたため、翻訳原稿を十分に吟味できなかった。
- ・発言時間超過などがむしろ日本側（コメンテーターを含めて）にみられた。
- ・日本側参加者はやはり中高年の男性が多い。

#### 4. 理論的総括

##### A. 各報告の概要（日本側報告は中訳題名省略）

鎌倉孝夫（埼玉大学名誉教授）

目指すべき社会主義原理の確立—中国特色社会主義の理論的課題として

中国人民の中での所得格差拡大、失業・要生活保護者の増大、公害の激発等の問題は市場経済の不十分不徹底によるものではなく、今日的擬制資本主導の資本家的企業による競争力強化・利己的利潤獲得行動自体に基本的原因がある。

問題の根源に対する規制、とくに利己的利潤目的の生産・経営活動に対する規制強化、そして利己ではなく自立と連帯を志向する人間資質形成・主体形成が決定的課題。

兪良早（南京師範大学教授）

中国特色社会主義的歴史必然性と基本精神

（中国特色社会主義の歴史的必然性と基本精神）

中国は前世紀50—60年代にソ連社会主義体制を引き写して、曲折した道を歩み、経済成長と社会進歩が緩慢という結果を生み出した。その改革の実行と中国特色社会主義の建設は、必然であり必須であった。改革開放と中国特色社会主義は、中国の遅れた面貌を初歩的に変え、人民の生活を大きく改善した。

張乾元（武漢大学教授）

中国特色社会主義道路的航路座標

（中国特色社会主義の道の航路標識）

中国社会主義の改革開放は、ソ連の社会主義体制と建設の経験に対する省察から始まった。中国の改革開放はソ連の発展モデルに対する省察、修正あるいは揚棄。鄧小平は習慣の持つ拘束力と主観的偏見の束縛を打破し、“どのような社会主義を建設するか、いかに社会主義を建設するか”ということに初歩的に系統立てて答え、“過去に我々は社会主義を完全には分かっていなかった”という一連の問題をはっきりさせた。

大西広（慶應義塾大学教授）

社会主義の技術的基礎—労働条件の改善が生産力を発展させるようになることの意味—労働条件の改善をすることが技術的必要となった時代の社会システムをもって「社会主義」と定義すべし。資本主義が労働条件の改善をなぜ実現できないのかという問題に関する報告者の理解を示し、その条件の変化=逆転が日本の特定産業で生じつつあることを示す。

譚毅（中山大學副教授）

国情与伝統—中国特色社会主義理論的特色緣由

（国情と伝統—中国特色社会主義理論の特色の由来）

中国特色社会主義が包含している内容は、中国の特徴、社会主義の特色、中国の特色を持つ社会主義の三点。基本的な国情一人は多く土地は少なく、生存空間は逼迫しており、生態環境は脆弱—が中国特色社会主義の一大特色。中国の歴史と伝統—郷土社会の伝統、民間共産主義と役所共産主義の伝統、集団文化と差別構造、中央集権の伝統—は現代中国特色社会主義のもう一つの特色。

松井暁（専修大学教授）

過渡期における階級と国家

過渡期の階級と国家に関するマルクスの学説について、分析的マルクス主義（AM）学派の階級理論、日本における近年の国家資本主義論を踏まえて検討を加え、新たな仮説を提示する。AMの仮説は、国家主義（国家官僚社会主義）が一つの社会体制として独立した位置づけを与えられている。この理論は、現代資本主義での新しい中間階級や既存社会主義国家における官僚支配という現状をうまく説明してくれるだけでなく、社会発展を進める課題を簡潔に示している。

郭文亮（中山大學教授）

繼承与創新：構建中国特色社会主義權力制約監督理論

（繼承と創新：中国特色社会主義の權力制約監督理論の構築）

中国は中国特色社会主義權力制約監督理論を構築することを必要としている。1. 政策決定権、執行権、監督権分離理論の新たな創造、2. 制約監督者の独立性、權威性理論の新たな創造、3. 相互制約、相互監督と相互協調理論の新たな創造、である。

陳崎（中国人民大学副教授）

改革開放時期中国政党制度整合新社会階層功能分析

（改革開放期の中国政党制度と新社会階層機能の整合の分析）

現代社会において、政党制度は各種の社会的利益勢力を整合し、政治的安定を保持し経済社会発展を促進する重要な機能を担っている。中国の改革開放は膨大な新社会階層を造り出し、政党制度の整合機能に対して新たな要求を提起した。中国共産党が指導する多党合作と政治協商制度には新社会階層を整合する方面において速やかに解決すべき問題が存在しているが、既に明らかな成果を勝ち取った。

田上孝一（立正大學講師、社会主義理論学会事務局長）

疎外論としての実践的唯物論——マルクス主義哲学の新たな体系化のためにマルクス主義哲学体系を構想する際の前提とすべきマルクスの哲学とは実践的唯物論であり、実践的唯物論にいう実践とは疎外を止揚するための倫理的実践＝プラクシスである。マルクス哲学の本体は疎外論であり、実践的唯物論の本質は疎外論。だからスターリン主義的推广論に代わる、マルクス主義哲学の新たな体系化のために必要なことは、その核心が疎外論であるところの実践的唯物論を、マルクス主義哲学の中心内容にすることである。

龍柏林（中山大學副教授）

理性・価値・文明：中国特特色社会主義的三重解読

（理性・価値・文明：中国特特色社会主義の三重解読）

今日に至るまで、中国特特色社会主義に正確で完全な定義を下そうとすることは、依然として困難なこと。理性・価値・文明の三視点から、その解読を試みる。中国特特色社会主義は実践理性の品質、人間の基本は幸福であるという価値の追求と多文明結晶体の有機的統一である。

村岡到（ロゴス社）

中国の政治体制は〈党主政〉

社会主義革命を実現するといっても、政治の領域では原理の上で根本的に変革されねばならない内実はない。中国の政治体制は党主政と呼ぶのが最もふさわしい。そして、この呼称が妥当であるかぎり、それは社会主義の政治体制ではありえない。別言すれば、現在の中国はけっして「社会主義社会」ではない。

秦宣（中国人民大學教授）

論当代中国政治制度的特点

（現代中国政治制度の特徴を論ず）

中国の政治制度の特徴と優位性。第一、共産党の指導を堅持し、法律によって国を統治し、中国民主政治発展の正確な方向を堅持。第二に、多数の者に民主を実行し少数の者に独裁を実行することの統一を堅持。第三に、民主と集中の統一を堅持し、社会主義民主の有効性を保証。第四に、党内民主、党外との民主、人民民主の統一を堅持。第五に、選挙民主、協商民主、自治民主などの形式の統一を堅持。

劉誠（揚州大學教授）

中国多党合作制包容性研究

（中国多党協力制度の包容性研究）

現代中国政党制度は、中国共産党が指導する多党協力制度であり、この制度は、1949年に中華人民共和國が成立した際に形成。強力な包容性を具え持ち、その包容性は新民主主義

革命の時期に中国共産党と各民主党派が団結協力した歴史的延続性が決定づけているもの。中国共産党の政治包容性は執政党となって以降の具体的体现であり、それは、中国優秀伝統文化に根差すもの。

岩田昌征（千葉大学名誉教授）

#### 経済システムのトリアーデと社会主義

私の社会主義論は、史的唯物論的社会発展段階論に立脚するのではない。前近代社会（交換・再分配・互酬の融合・混合）から近代社会に向かう発展における三つの理念（自由、平等、友愛）の登場とそれら三理念を引張り、また引っ張られ、また三理念を支え、また支えられる三種の経済システム（市場、計画、協議）の自立的出現の歴史的・現在の意味を確認するもの。

孫建社（南京師範大学教授）

#### 全球化、多様化与中国特色社会主義

（グローバル化、多様化与中国特色社会主義）

グローバル化は世界発展の必然的過程。グローバル化と各国多様化は同時に行っても矛盾しない。中国特色社会主義はグローバル化進行中の多様化発展の一つの珍しい煌びやかさ。概して言えば、中国特色社会主義はグローバル化と各国発展の多様化の有機的結合の見本。

徐一睿（嘉悦大学講師）

#### 中国の地域間格差を考える一県レベルデータを中心に

改革開放政策の最初の 20 年間、中国の政策決定者にとって効率化は至上命題。2000 年以降、特に 2003 年「和諧社会」論が打ち出されてから、地域政策で地域間の財政力と経済力格差が是正されてきた。しかし、西部地域や中部地域に属する多くの省の省内経済力格差がこの 10 年間で大きく拡大している。中国の地域間格差是正の重点は従来の沿岸部と内陸部の格差から、各地域内、特に内陸部の省内格差に変わりつつある。

朱小玲（南京師範大学教授）

#### 建国以来中国共産党農村扶貧開發的歴史回顧与經驗啓示

（建国以来の中国共産党農村貧困援助の歴史的回顾と現実の思考）

貧窮は社会主義ではなく、社会主義は貧窮を消滅させなくてはならない。新中国成立後、異なる時期の農村貧困情況の異なる特徴を根拠として、中国共産党と中国政府は、相応の貧窮援助開發政策の措置を展開する指導を行った。小規模の救済式貧窮援助から体制改革を以って主導となす貧窮援助にいたるまで。つまり、“輸血”を以って主となす貧窮援助から、“造血”を以って主となす貧窮援助へ。さらに再び総合性の貧窮援助開發へ。

戴玉琴（揚州大学教授）

農村基層民主政治發展價值的三維向度

（農村基層民主政治の發展價値の三D方向度）

村民自治制度を基本となす農村基層民主政治は發展中に更に草の根性と荒削り性を有している。その成長は更に種々の構造的矛盾を存在させ、その完全な發展には更に充分な支える条件が欠乏している。その歩む道筋はさらに多くの制約性の要素を存在させている。しかし、これらは皆、中国農村の基層民主政治そのものの發展價値を埋没させてしまうには充分ではなく、故に、我々は理性的にこの價値を透視する必要がある。

第十九、第二十報告

瀬戸宏（摂南大学教授）

中国特色社会主義・新民主主義・開發独裁

中国特色社会主義を、新民主主義と開發独裁の両面から考察。

曹亜雄（武漢大学教授）

蘇聯模式的当代反思

（ソ連モデルの現代的反省）

ソ連は最初に社会主義理論を完全に実践に転化した国であり、多くの未解決の歴史の謎が存在している。ソ連とソ連モデルを研究することは、社会主義の未来・前途と運命に対して、進行中の世界社会主義の建設と世界社会主義の運動に一定の歴史的意義がある。ソ連モデルの歴史的地位と役割。ソ連モデル解体の根本原因。中国特色社会主義とソ連モデルの関係。私は、改革開放以前に我々に存在していた弱点はソ連モデルの誤りではなく、中国伝統体制の未成熟であり不完全である、と考えている。

B. 理論的総括

・全体としては、中国側は中国特色社会主義の現状に肯定的であり、日本側は否定的あるいは懐疑的である。

・活発な討論がおこなわれたが、個々の報告に対する即時的な疑問の討論に、まだ留まっている。社会主義に対する理解は、日・中でかなり大きな隔りがある。日本側の間でも隔りがある。

・中国側参加者は、主に南京師範大学俞良早教授の関係によるもの。いわゆる（老）左派で、新左派などは含まれていない。（新左派を含めるのがいいのか、という問題はあ

5. 今後

2015年夏に第五回中日社会主義フォーラム実施をめざす。中山大学が候補。

日本側参加者には、科研費から旅費を支出できる。

これ以外に、中国から一、二名の小規模な研究会を日本で開催してもいいかもしれない。

## 日中社会主義フォーラムでの収穫大

村岡到

一二月二一、二二日の両日、東京・三田の慶応大学で第四回日中社会主義フォーラム「中国特色社会主義の行方と理論問題」が開かれた。主催は社会主義理論学会で、共催は慶応大学東アジア研究所と科研費補助金「中国特色社会主義の多角的研究」プロジェクト。参加者は六〇人。

訪日した一二人の中国側研究者と日本側の八人の研究者が、八つのセッションで報告し、それぞれコメントもあり、過密な日程で討論を深めた。中国からは、南京師範大学、武漢大学、中山大学、中国人民大学、揚州大学の教授らが参加。報告テーマなどについては、社会主義理論学会のHPに掲載されているので省略して、特に感じたことをいくつか備忘録としてまとめてみたい。

何よりも強く実感したことは、中国の研究者が非常に真剣に現実と格闘しながら理論的探究を深めていることである。私はそれらの報告を聞いて、中国「社会主義」について改めて認識し、探究する必要を痛切に感じた。これが、最大の収穫であった。

なかでも、中山大学の郭文亮さんの報告「継承と創新：中国特色社会主義の権力制約監督理論の構築」は、きわめて高い問題意識によって、「国家権力に対する制約監督」をいかにして創りだすかを焦点にして独創的な見解を展開した。武漢大学の張乾元さんの報告「中国特色社会主義道路的航路座標」も面白かった。揚州大学の戴玉琴さんによる「農村自治」をテーマにした報告もよかった。

私は、第五セッション「中国特色社会主義の政治体制」で、「中国の政治体制は〈党主政〉」と題する報告を行った。この報告については、同セッションのコメントだけではなく、最後の討論の時間に司会をした南京師範大学の兪良早さんがかなり時間を割いて取り上げ、批判を加え、重要な論争点となった。

日本側の報告者岩田昌征さんが、最後の討論で、ソ連邦の「社会主義」は崩壊したのに、中国「社会主義」はなぜ崩壊しなかったのかと設問して、その二つの根拠として、①中国は植民地だったので、そこからの脱却が課題であり、マルクス主義はその手段として活用されたこと、②東洋では「矛盾」が存在することを許容する政治風土が存在すること、を指摘した。きわめて鋭い指摘である。さすがと唸る発言であった。

シンポジウムではいわゆる「国家資本主義」も論点となったが、その生産力主義に偏った「理論」では、現実の一面を歪曲して解釈することしかできない。

私は、トロツキズムあるいは「反帝国主義・反スターリン主義」の世界で育ってきたから、一九九〇年代初めに毛沢東について少し読んだくらいで、中国についてはあまり考えたことはなかったが、否定面を批判・断罪するだけではなく、中国の長い歴史に照らして、

中国人民の歴史的課題が何だったのか、そこでマルクス主義、あるいは社会主義理論はどのように作用したのかについて考えなくては理解できた。

中国指導部が提唱するようになった「中国特色社会主義」という特徴づけには深い意味がありそうだと強く実感した。

個人的なことになるが、私は二〇〇二年に北京で開催された「国際シンポジウム二一世紀の世界社会主義」に招待されて参加し（ロシアからはブズガーリン夫妻も参加、旧交を温めた）、そこで司会をしていた武漢大学の梅栄政さんと知り合い、彼によって二〇〇四年に武漢大学に招待されたことがあった。休憩時間に張さんに私の本をプレゼントしたら、張さんが彼の教え子で、私の訪問を憶えていたことが分かってビックリだった。

最終日のお別れの懇親会で、うまい具合に、張さんと郭さんと慶応大学に留学している学生と四人のテーブルに着席することになり、その学生が通訳して会話することができた。私の報告に興味をもったということである。郭さんは高倉健の映画がよかったとか、栗原小巻、山口百恵、三浦友和の名を書いて、中国では人気があると話した。私は、領土問題について、マルクスは「土地の所有はよくない」と主張していたと一言はなしたが、笑顔で応じ同意したようであった。

「村岡さんは毛沢東をどう評価していますか？」と問われ、困ったが、一九九〇年代初めに中国革命文献を読んだときに、毛の「梅を詠ず」という詩に感動したことを思い出して、「一時は暗記していたが、今はすっかり忘れた」と答えた。長征のなかで、「人民の針一本取ってはいけない」という戒律を課したことにも感動した、と話したら、それが現在の格差問題を解決する根本に据えられなくてはならないという返事が返ってきた。

このような個人的体験もふくめて、今回のシンポジウムは大きな収穫を得る場となった。開催に中心的に貢献した瀬戸宏さんなどに深く感謝します。

〈追記〉

この短文を、文中の武漢大学訪問時に通訳してくれた程さん（現在は徳島大学に留学中）に翻訳していただいて、名刺を交換した研究者の何人かにメールしたら、さっそく返事が返ってきた。中国語ではメールできないが、PDFにすると文字化けしないで伝わるのは便利だ。武漢大学の研究者と交流が重ねられたことも重なる収穫であった。

## 事務局からのお知らせ

- ・ 会費を納入して下さい。同封の振込用紙をお使い下さい。年会費は3000円です。最新年度は**2014年度**。
- ・ 会員の著書を紹介します。書評掲載希望等ございましたら事務局にご一報下さい。ただし、必ず書評が掲載されるわけではありません。
- ・ 次回研究会は2014年7月27日を予定。